

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	血の絃（つづき）：新体詩：文苑
Author(s)	江中，紫秋
Citation	龍南會雜誌， 1 2 8： 2 7 - 2 8
Issue date	1908-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6177
Right	

血の絞(つづみ)

江中紫秋

四、張子の翁

ひと夜わが心の森の奥ぶかに
もとほりゆけば四阿屋あづまやに黒き影見ゆ。

五月雨の夜の丑満に誰が業わざぞ

つくづく見れば妖怪あやかしか張子の翁おきな

いろあせく大提灯たいとうのそのさまに
観念くわんねんの顔うちしがめ軒のきに吊さる。

爛壞らんわいせる朱あかのころものいちめん

優曇華うとうわのはなさき匂ひ仄ひそかに啼なきぬ。――

雨にゆく車の幌ぼろの内部うちらにて

すゝり泣なする狂女くるうめがいたき聲色こゑいろ。

たちよれば無限むげんに曳ひける光芒くわうぼうの

硝子の眼硝子のまなこ、その底そこに映うつるはくら

森の影。池の濁水にごりみづのにが笑ひ。

見るからに、にくき翁おきなのつらだまし

鬚ひげ長なが穎ひらのその頬ほに我われは吹ふきかく

煩累わづらひの煙草たばこの煙けむり。かゝる時

煙けむりを乗のせし數萬たふの小こさき車くるまの

騷立さわだちに耳みみそばだつる優曇華うとうわは

翁おきなの胸むねを毛布けふのもてあぐさめかをに

そと撫なでつ。さあれ翁おきなは惡水あくみづの

沼ぬまに浮うべる死魚しぎよの如ごとく、身みうごきもせず。

凶時きうときの今宵こんやこそ聞きけ、わちかたの

心の川かみの鉄橋てつきょうをとがろきすぐる

瀛車えいぐるまの音ね――世よの煩累わづらひに倦うじたる

たぞき流笛りゅうふえの嘆息なげいきに、信號柱しんごうちゆうの灯ひは

青あおと赤あか、心の闇くろにひらめき狂くるふ。

五、腦の血

生汗なまあせの灰濁はいだくむ顔かほに

せはしげに、めばたくまなこ

人の眼か

はたや我が眼か

日と闇の色を量めく。

あふれもじ。

慵き頭蓋。

れどもなく淀み流るゝ脳液は

盪げし鉛のそのさまに波ゆさぶりて

うちかへす頭骨の壁の痛きかぢ。

かくて倒れし喫煙の酔者の吐息

肋骨は伸びつ、ちぢみつ。

見わたせば

こはまぼろしか

天井の棧のいくすぢ 床の壁

柱も、窓の花罌粟も

量めきめぐる。

苦しみの闇の奥がに

炎に初むる脳の噴火や。――

脳髓の大動脈を血の熔岩ぞ

くるひて走る。

わりくは

ふわくくと

脳膜は顛門うちて

ニコチンの毒氣をぞ吐く。